

神奈川県総合教育会議議事録

名 称：第1回神奈川県総合教育会議
開催日時：平成27年6月16日（火曜日） 午前10時35分から午前11時30分
開催場所：神奈川県庁 新庁舎5階 第5会議室
出席者：黒岩祐治知事、具志堅幸司教育委員会委員長、高橋勝教育委員会委員、倉橋泰教育委員会委員、河野真理子教育委員会委員、吉田勝明教育委員会委員、桐谷次郎教育委員会委員（教育長）
次回開催予定日：未定
問い合わせ先：政策局政策部総合政策課政策調整グループ
電話番号 (045)210-3056（直通）
ファクシミリ (045)210-8819

経過：

1 開会

平井政策部長：ただいまから第1回総合教育会議を開催します。開催に先立ちまして、本会議を主催します黒岩知事からごあいさつをいただきます。

黒岩知事：神奈川県知事の黒岩祐治です。本日は、大変お忙しい中、お集まりいただき、誠にありがとうございます。また、委員の皆様には、日頃から、本県の教育行政についてひとかたならぬご尽力をいただいております、厚くお礼申し上げます。

さて、皆様ご承知のとおり、大津市で起きたいじめ事案における市教育委員会の対応を一つの契機として、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正され、今年の4月から施行されました。

この法改正は、地方教育行政における責任体制の明確化、迅速な危機管理体制の構築、地方公共団体の長と教育委員会との連携強化を図る等、抜本的な制度改正であります。

本県においては、これまでも私と教育委員会の皆様とで定期的に意見交換を行い、教育に対する私の考えや思いをしっかりとお伝えし、ともに連携しながら神奈川の教育行政を進めていくことができたと思っております。

今回の法改正による総合教育会議の設置は、本県のこれまでの取組みが制度化されたものと受け止めています。引き続き連携して、本県の教育行政を推進していきたいと考えております。

本日は、第1回目の会議となりますが、本県の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の根本となる方針を定めた「大綱」についてご議論いただきたいと思います。

現在、県では第2期の「かながわグランドデザイン」実施計画を策定しているところであり、教育委員会では「かながわ教育ビジョン」を改定しているところでもあります。

大綱とこれらの計画とが一体となって、本県の教育環境のさらなる充実を図るとともに、魅力と特色のある神奈川の教育を実現するよう取り組んでいく所存であります。

それでは、これから教育委員会の皆様としっかりと議論していきたいと思っておりますので

どうぞよろしくお願いたします。

2 議事

議題1 総合教育会議の運営について

平井政策部長：それでは、総合教育会議の運営について。神奈川県総合教育会議運営要綱の（案）を事務局から説明させていただきます。

山崎政策調整担当課長より資料1を説明。

平井政策部長：神奈川県総合教育会議運営要綱についてご説明させていただきましたが、委員の皆様何か意見はございますでしょうか。

（「特になし」の声）

平井政策部長：特になしということでご了承いただきました。それではここからは、この神奈川県総合教育会議運営要綱に基づいて、知事に進行をお願いしたいと思います。それでは、知事よろしくお願いたします。

議題2：かながわ教育大綱（案）について

黒岩知事：それでは、議事を進めます。まず、かながわ教育大綱（案）についてです。私の考えをまとめましたので事務局から説明させます。

山崎政策調整担当課長より資料2及び資料3を説明。

黒岩知事：ただいまの大綱（案）について、ご意見、ご質問等がありましたらお願します。

倉橋委員いかがですか。

倉橋委員：非常に良く出来ていると思います。「いのち」から始まって、学校だけではなくて、環境、周りと一緒に教育をやっていく。それと文化についても神奈川から発信してやると、並びもきれいにできていて、非常に良いと私は思います。ただ、企業人として言わせてもらおうと、企業とつながっている部分が少し弱いかと思いました。いろいろな現場を回っていたときに、高校生の話を聞いて思ったのですが、小中学校は、学区が決まっているので、地域とつながりやすいのだけれど、高校になると、学区が神奈川県全域になりますから、いろいろなところから来る人がいるわけですね。農業高校が作ったものを近所の人に売るという形のつながりはわかるのですが、高校生になったらもう大人なので、企業とつながる、社会とつながる部分を出していったらどうなのかと思いました。社会とつながる部分では、平日頃私は思っているのですが、たとえば儲けること一つ取っても、小さい頃から教えていないものなので、どちらかというとお金儲けは悪というのが、まだ日本の中には残っているのじゃないのか

など。社会に出たら、何人かの人と仕事をして、代価を得て、そういうところから社会生活に入っていくところが、少し弱いのではないかなと。私たちの親の世代は、農業や漁業をやっていると収入がないときだってあると。サラリーマンが増えてきたのですけれども、社会に出るのには、良い学校を出て、良い企業に入れば、ずっと給料をもらえる。安泰じゃないかと。だから、猫も杓子も普通科。猫も杓子も大学となっているのですけれども、今の社会と違っているのではないかなと。社会ではそれだけじゃなくて、いろいろな種類の人間が要求されている。それに対して、学校や教育の内容が、若干ずれてきたのではないかなという気がしています。アメリカではレモネードを売るというものがあって、ゴルフ場の横で、子どもたちがレモネードを飲んでいたら、ゴルフをしていた人が、「それを売って。」と言ってきたと。これが商売になると思ったら、次は、子どもたちが自分でレモネードを作って売ようになる。どんどん売れ出すと、人が足りなくなるから人を雇用すると。子どもたちは宣伝するようになる。だからちょっとしたことで、つながるようになるのですよね。高校も多様化するべきだとは思っているのですけれども、世の中はそうやって動いていることを、小学校、中学校から教えていければ、そういうところに行ける機会になるのではないかと。そういう意味で社会とつながる、企業とつながる部分を押し出していただければと思います。岐阜県で、イグサの産地で、畳職人だけの高校がある。そうすると、伝統芸能の畳を売るためには、畳職人がいなくなると困ると。テレビにもなりましたが、三重県の高校で、学校自体がレストランを持っていて、料理をするだけではなくて、ウェイターもやりながら、社会に出ることを勉強する。そこは、就職率が100%らしいのです。今だと高校を出ないと専門学校、料理学校は行けないと。もっと高校のときから単位が取れるようにすればどうか。例えば衛生学で単位をもらおうとか、大学でも、失礼ですけど、重箱の隅をつつくような、ということでも単位がもらえるので、高等教育なので、もっと専門的な部分は単位としてもらえて、高校を卒業したらすぐ社会につながる。やりたいものを早く見つけることも大事なのではないかなと。スーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクールはすごく大事だと思うのですけれども、世界で活躍する人種、ローカルで活躍する人種、いろいろな多様性があるので、トップの人もいいし、学び直しもいいのですけれども、もう少し、ボリュームゾーンであるのではないかなと。そういうところで、社会とつながるところを押し出していいただくと、選んだことはみんな違うし、社会はいろいろな人を望んでいるので、そこを強調していただければ。これ希望で申し訳ないのですけれど。

高橋委員：神奈川の教育の大綱、今後4年間を決める会議ですので、まず大枠で言うと、学校教育がいろいろな広い裾野で支えられているという印象を持ちました。どうしても従来は、「いのち」は、厚生や民生で担当しますし、子ども・子育て、家庭は、別の部局で担当する。教育委員会は、社会教育はあるが、学校教育が中心。だけれども今の社会は、複雑化してきて、学校の問題を学校だけでがんばってくれと言われてもなかなかできにくい。家庭の問題も母親だけがしっかりすればよいということでもない。いろいろな問題が絡み合っていて、それぞれが孤立化して、お互いのつながりが見えにくい時代に、教育を総合的に見ていくという視点が表れていてありがたく思います。特に知事は

前々から、「いのち」の教育、あるいは、未病という健康に関することを提唱してこられました。それがきちんと入っている。「5 地域」のというところで、子どもが減っている、学校の統廃合がある意味やむをえない時代ですが、そうなると地域社会が地盤沈下するという恐れが十分あるのです。やはり学校を地域の核として、地域の学習、社会参加を進めるということがしっかり出ていますので、学校を支える体制を広い視野の下で、神奈川県は作っていかうというメッセージがこめられていると思いました。

具志堅委員長：大綱としまして、1番から6番まで今、倉橋委員が話したように同じような感想を持ったわけでありませうけれど、ここに網羅されていない就学支援というものも文言として、載せていった方がいいのではないかと、そんな思いがあります。特に貧困な家庭に対する教育を受けさせていくというところ、お金がないから教育を受けられないというのではなくて、奨学金制度も含めて就学支援というものはっきりと文言として残した方がいいのかなということを感じていました。

河野委員：全体の感想から。高橋先生がおっしゃったのと同じなのですが、A3の紙の中で全てを網羅していただいて、私たちが日頃、施設や学校で見ている様々な課題が点在做るのだけれど、それが点と点で線になり面になりというような感覚を受けました。私の視点から三つほど感想を持ったのですけれども、たとえば、2の生きる力を育むというところで、学び高め合うということですね、それから確かな学力は本当に重要で、学力をあえて2・6・2と分ける必要もないのですけれども、上の方の人も下の方の人もそれなりに伸びていくという、これから多様な教育が必要な中で、これから高校の教育も変わらざるを得ず、入試も変わります。その時に、書いていただいているのですが、さらにもっと神奈川県で力をつけられるような仕組みづくりですとか、調査ですとか、そういうものがまた、ここに盛り込まれればありがたいというのが一つ。キャリア教育と書いていただいて、これは大変ありがたいのですが、生涯にわたる生き方を見つけたいというのがすごく重要で、未病にも関係すると思うのですが、特に日本の女性は世界で一番の長寿ですね、ここで生き方、目先で働くだけでなく生涯に渡り、自分が食べていかれるということも未病という健康面とともに考える教育ということを神奈川県から発信できたらいいな、そのためにいろいろ調査したり研究できたらいいなというふうに思いました。最後に地域とのつながり5番のところ、これは先程、高橋委員もおっしゃっていたのですけれども、学校教育だけでは立ち行かないので、例えば、具志堅委員長がおっしゃった就学を支援するという学校での在り様とその貧困なご家庭の方々が毎日朝と夜ご飯が食べられるような地域のサポートとか、地域で相談者がいるとかいろいろな地域づくりと学校の教育とが連携していくということがこれから重要だと思いました。

吉田委員：非常にこの大綱良くできているなと思います。まず一番に「いのち」というのがある。黒岩知事が最初に就任なさった時にキーワードとして「いのち」ということを話され、それを聞いて私は「こころ」というものをキーワードにしていろいろな活動をしていきたいと話したことを覚えています。まず、「いのち」ということに関して「いの

ちの授業」、実際の高校でもこんな授業を見たり聞いたり発表を聞いたり、非常に感銘を受けたのを覚えています。そんな中で「いのちの授業」というのは思いやりでありやさしさであり、そういった道徳心を育てるのは非常に大事なのだということを感じています。それに対して、具志堅委員長が就学支援は大事な要素である、貧困の中でいろいろな形で、食べ物も苦労する中で、そんなことがおろそかになりがち。特に私は特別支援級の学校医を四つくらいやっているのですけれど、両親の相談にあたってはその背景も既に生活保護に関するものであり、医療を受けるにあたっては生活保護のそういった形でやっていく。そういうところを何とかしてあげないと家庭教育というものも困るだろうし、道徳的なやさしさ、思いやりも生まれてこないのではないかなと感じました。昨今のテレビのニュースで、財務省だったと思うのですが最近では少子化だ、少子化に伴って小学校の教員を削減しようじゃないかというニュースがまことしやかに流れてしまったのですけれども、これは大変な過ちであって、やはり小学校のスタートの時点でしっかりとした授業以外に「いのちの授業」から道徳心、これを植え付けて将来の子どもにやさしさ、思いやり、その結果として暴力行為であり、不登校であり様々な事件等も未然に防げると感じています。知事がよく医師会の方でも未病という話をしているので、これを子どもの時代からやっていくことは非常に大事なことだと思います。今、いろいろな実験がやられていて、今の実験でそのまま人間に適用すると平均寿命が大体 100 歳になると言われている。そして、今生まれた子どもはおそらく 148 歳まで生きるのだ、これは定説ではないですよ、ある学者がこう発表している、そんな時代であれば、やはり未病対策は非常に大事であって、これがさらに次の世代へだんだん発展していく、このようなことを思っているのだから、是非この辺をキーワードとしてしっかりやっていきたいと思っています。

桐谷教育長：一つには総合計画があって、私どものかながわ教育ビジョン、これは個別計画になっています。もう一つ、こういう形で知事が教育委員会と協議して定める大綱、やはりここは底流に流れるもの、考え方はしっかりと整合性をとらせていただきたいなというところが一つございます。そういった面では、私の目から見てかながわ教育ビジョン、総合計画との整合性という面では整理していただいたのかなという印象を持っています。それと委員長の方からお話させていただいた就学支援につきましては、奨学金という形、今で考えると、昔は公立の生徒の方が私学の生徒よりも貸付けを受けていました。ところが今、平成 27 年度で大体 5,000 人だとすると、私学が 3,500 人、公立が 1,500 人という形で逆に私学の生徒が受けている割合が高くなっている。そうしますと、県全体の高校生達の就学支援という面でも一つにはこういった総合教育会議の中で議論いただいて整理いただくというのがあるのかなといった印象を持ちました。

黒岩知事：冒頭、倉橋委員が「企業」、とお話をされていて、2 番の生きる力のところで、キャリア教育を実践して企業との連携による職業教育の充実というところですか、3 の豊かな学びを支える教育環境づくりの中の 4 つ目の丸の学習活動に地域の方や企業などの協力を得るといった形にはなっておりますけれど、今実際に行われていることで、私が面白いなと思っているのは、高校生がコンビニエンスストアと組んでスイーツを開

発する。神奈川県でもいくつかやっております、それで実際に製品化をするわけです。ただ単に作ってみるわけではなくて、実際の製品を作ってそれを実際のコンビニエンスストアで、自分たちでデザインからコンセプトからパッケージから全部作ったものを実際売るといふ、そういうことをやっている。そういったことが企業との連携に繋がっていくのかなと。それに参加した人たちの顔を見ると本当に目の色が違いますよね。本当の製品を作ったわけですからね。ああいうことは非常に大事なのかなと思います。その辺の表現を考えてみることはありそうですね。就学支援の問題、確かに今大きな問題、あまり昔は言わなかった、子どもの貧困問題、これは今一番大きなことであることは間違いない。確かに、そういった言葉、表現が入っていないというのは確かにそうですよね。子どもの未病対策、これは最近ひらめいたコンセプトです。これはとしたのですよね、というのは、未病対策というのは超高齢社会を乗り越えるために大事なことでずっと思っていたので、私たちの見ている先というのは中高年層だったのです。未病を治すためのかながわ宣言をやって、食が大事だ、運動習慣が大事だ、社会参加が大事だ、こういうふうに言ってきたわけです。その時に最近の子どもは運動能力がすごい低いですよっていう話を聞いて、特に神奈川県はすごい低いと聞いて、それで文部科学省のデータを見たらなんと小学校5年生の女の子の運動能力が全国でビリだと。これを見てビックリして、ある整形外科の先生に聞いたら最近の子どもたちの運動能力の衰え方はすごいと。しゃがむことができない子がいると。しゃがんだら後ろに倒れちゃうと。まっすぐ手を上に上げなさいと言っても上げられないと。基本的な運動動作すらできない子どもがたくさんいるのだという話を聞いてこれは大変なことだなと思った。つまり、運動習慣がない子どもたちが育っていくと、子どものうちに運動習慣ができなければ、大人になってから運動習慣をつけることは非常に難しいことだと思う。

食のあり方を考えたときに、今の子どもたちの食生活の乱れなどいろいろな形で指摘をされた。昔は近所の子どもたちと走りまわって駆けっこや鬼ごっこをして遊んだが、今はその光景はあまり見えなくなった。自宅に閉じこもってパソコンやスマートフォンに向きあったりしているとなると、未病を治す三つの要素である食も運動習慣も社会参加も子どものうちから習慣づいていないとなると、この子どもたちが中高年齢層になったときに、そこから未病対策を始めることは不可能に近いのではないかと思ったので、子どもから未病対策を始めなければならないと思って、最近になって入れた言葉なのです。

高橋委員：従来の教育委員会の中では、どうしても学力とか社会性の育成とか理想型がまずあって動く部分があるのですよ。今の知事のお話を伺うと、子どもたちが走る力とか、体を使うことが鈍っているという現実を踏まえて、私たちはそれに対してどうすべきかを考えておられる。どうしても教育はあるべき姿が先に立ってしまうが、同時に現実をもっと見なければならぬ。子どもに関わる多方面の方たちの話を聞かないといけぬと思っている。

私たちは学校という箱の中でついつい考えがちだけれども、社会全体が運動しなくても済むような社会になってきているのですよ。家にいてパソコンのゲームをやったりなど、社会の大きな変化を見据えて、食とか運動や社会参加の問題について考えていくこ

とが、この会議の課題であると思います。

河野委員：未病で生まれたときからですね。それと、現実、現場の話では共働きが増えている、女性もどんどん働かなければ困るという時代ということで、今まで日本ではなかった状況の中、神奈川県が豊かに子育ても、教育もしようということになるので、学校教育の中だけではなく、周りの力を借りながら一緒にやっていくことは重要なことだと感じましたね。

吉田委員：今の話につながる話ですけれど、自宅に引きこもりがちで、パソコン相手にゲームばかりやって体力がどんどんなくなっていくと、メタボリックシンドローム的に考えがちだが、心にも大きな影響を与えることになる。

すなわち、うつ病の発生にもものすごく影響を与えるし、切れる17歳で話題になったバスジャック事件があったときに、これは脳内セロトニンという物質が非常に減少していた。このセロトニンを作るためには、運動して陽に当たることが大事なことであることも含めて考えなければならないと思う。

私は医者だが、教授から言われたことで思い出されることが、医者になるには必要なことが三つあるということ。それは、やさしい気持ち、丈夫な体、そこそこの頭、である。頭なんてそこそこでよい。やさしい気持ちと丈夫な体さえあれば患者さんのために一生懸命やるだろう。でもこれは医者だけでなく、全人類に共通した必要なことなのじゃないかと思う。

だから丈夫でなければならぬかというわけではないが、小さいときから運動、意識をもって未病を防ぐことは、メンタル面にも良い影響を与えるということを付け加えさせてもらいました。

具志堅委員長：子どもたちと接していて、体を動かすことに喜びを感じていると思うのですよね。この前の「体力テスト」キャラバン隊でも子どもたちの顔を見ていると生き生きしている。

でも、実際問題として、子どもたちが外遊びをしているかというとなかなかしていない。外遊びのやり方もわからないし、そういう環境もない。塾に行かなければいけない。運動能力の高い子どもと低い子どもが神奈川は、二極化されているので、どのような仕分けをしていけば良いのか。現実をしっかりと見ていかなければいけない。入試制度のこともそこに関わるかもしれませんので。子どもたちを動かすための現状把握から始めて、一つ一つ対策をとっていかないと、運動習慣はなかなかついてこないのではないかと思いますね。

吉田委員：不登校の子ども、あるいは入社困難な大人のカウンセリングを多く行っていきます。具合の悪いときに、診断書を書いて、学校休め、会社休めということは簡単なことで、誰でもできることです。

一番難しいことは、休ませた後、どのタイミングで背中を押して教室に戻すか、あるいは会社に戻すか。そのためには、学校や会社に行かなければ将来困るだろうとか言う

お説教は、何の役にも立たない。

むしろ、いろいろな形で自由にしてもらって、運動して感動してもらって、良い汗をかいた時の帰り道というのは、我々でも純な気持ちになるように、そういうタイミングでそろそろ学校にでも行ってみるかと言って背中を押す瞬間、そのタイミングを見極めることが一番大事だと思う。そういう点からも運動というのは大事な要素だと思う。

黒岩知事：子どもたちに運動というと、私は自分の子どもとよく公園に行き、キャッチボールをやったりしていたが、そのうち公園ではキャッチボールをしてはいけませんとなり、最近公園から子どもの声が聞こえないなと思っていたら、公園では大きな声で騒いではいけませんと書いてあったりと、社会が騒音というものに対して過敏になってきている。子どもたちが元気よく走り回っていることが、一つのコミュニティになっていたイメージがあったが、子どもの声は騒音だという社会ができあがってくると、子どもたちは走り回れない。社会全体で取り組んでいかなければならぬところを突破できないですね。

高橋委員：子どもを見ていると昔に比べれば行儀が良くなってきた。乱暴や粗野でなくなって言うことは聞くようになってきているが、その分内にストレスが溜まってきた。メンタル面で傷つきやすくなってきている。

こういうことを考えると、土台となる「いのち」やメンタルな面を支えながら教育していくことが、この大綱にはにじみでていると思うので、これを進めたいと思っています。

河野委員：「3 豊かな学びを支える教育環境づくり」の「安全・安心で快適に学べる教育環境を整備」について、知事も既にご存知かと思いますが、神奈川県は私たち、学校も施設も忙しく結構回らせていただいているのですけれど、その中で学校や施設の老朽化がすごいです。いつもお力添えはいただいているかと思うのですけれど、安全ですとか、耐震化や老朽化に対する更なる対応を安全に関わるのでお願いしたいのと、このメンバーで女性は私だけなので、学校のトイレ問題も結構なものなので、その辺もよろしくお願いします。

具志堅委員長：県立高校 100 校計画で建てられた学校の老朽化についてはどう進めていくかは検討しなければならないし、耐震化の予算についても、これだけ取っていると思っても、耐震化を進める学校の順位が出てしまうと、県民からどうして何もしないのかと思われたりするのではないかと、安全・安心の観点からも、河野委員が言われた耐震化や老朽化の問題について今まで以上に積極的に取り組む必要があると思います。

桐谷教育長：基本的には今、まなびや計画で 10 年 1,000 億という巨大な予算を使って、神奈川の場合というのはいわゆる倒壊の恐れがある、子どもにとって一番安全なところ、そこの 97 棟をとにかく直していくのだということに全力を注いできたと。全国調査の順位はありますけれどもあれは棟数で率を出しておりますから、逆に 1,000 億かけてきた

お金をほかのいわゆる小規模補強のところに掛けてくれば、率だけでいえば、率は上がっているだろうと。ただ、いずれにしても神奈川県の場合というのは県立高校 100 校計画の中で、作られた年代がかなり古い、8 割方は 30 年近く経っている、やはりどこかで計画的な形でやっていく必要があるんだろうな、と。それを県全体の教育予算の中でどういう形でやっていくか、そこは知恵の絞りどころかなとは思っております。

トイレについては各校長先生方から非常にご意見をいただいておりますので、なんとかという気持ちはございます。

黒岩知事：選挙のときも言われましたものね。トイレの問題というのはね。「なんとかしてください。子どもたちがかわいそうですよ。」と。まさにそうですよね。

河野委員：一つの文化ですからね。

吉田委員：どこのホテル、レストランに行っても、良いホテル、レストランかはトイレを見ればわかる、というのが通常の説ですからね。やはりまずはトイレをきちんとしておかないと。

倉橋委員：僕らがレストランに行くとトイレが汚かったら二度と行かない、少し地方へ行くと洋式でなかったりすると困ってしまう。それだけ文化が変わってきている。いいレストランは、30 分に 1 回見回りして清潔にしている。だけど清潔のまえに和式では用を足しにくいという部分があって、それ以前の問題ではないかと思うのですよね。特に子どもたちは自分の家がほとんど洋式だから。

高橋委員：今、やはり、学校が選ばれる時代になってきた、ということですよ。高等学校で学校説明会を開いたとしても、いろいろな良い説明があったとしても、お手洗いへ行ってもそこで幻滅することが十分あり得るわけですよ。それで志望校を変更するということがある。私は実際に学生から聞いたことがある。これが結構大事な要素ですね。

河野委員：さっきの続きの耐震の話ですが、どうしても切り口が違ってしまいますのでけれど、私は、社会人の働いている人たちの人材育成をしているので、地震がありますよね、最近ちょこちょこ。そうするとたいてい親御さんたちが「うちの学校は大丈夫」というのですよ。だから、やはり行っている先というのを、すごく気にされたり、その建物の震度とかすごく気にするのだなと感ずるので。もちろん建物だけではないのかもしれませんが大切なのかなと感じています。

吉田委員：学校の第三者評価というのが最近出てきているのですよね。同じように病院も第三者評価で、サーベイヤーが見回っていきます。その最大の見るとポイントはトイレという項目が挙がっています。においがしたりするとそれだけで C がついて機能評価が通らないという形になっていて、それも大事なことだと思うし、そこできちんとしたシャワートイレは高く評価する、というコメントがあるくらいで。シャワートイレまでとは

言わないけれど、そういったことは考えていかないといけない時代だとは思いますが。

具志堅委員長：一つ、内容に入ってしまうのでどうかと思うのですが、答えられる範囲で教えていただきたいのですが、6番の四つ目の丸に2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えたアスリートの育成や県立体育センターの再整備を行います、という非常に心強い発言をいただいているわけですが、具体的なイメージとして何かおありでしたら教えていただけませんか。

桐谷教育長：アスリートの育成は、この間の教育委員会の補正予算の中でご説明させていただきましたが、神奈川ゆかりの選手が2020年東京オリンピック・パラリンピックで活躍をするということが、やはり県民の皆様にとって大きな喜びになってくるだろうなということで、ゆかりの選手を育成していきたいと。それから県立体育センターにつきましても隣接する県立総合教育センターと一体的な整備という形でこれまでも何回か教育委員会の中でもご議論いただいていると思いますが、それを着実に進めていきたいと、一つの契機は2020年というそこに向けて、ただそれ以降も20年30年と神奈川のスポーツを振興していくために、県立体育センターを拡充してやっていきたい、そういう考えでいます。

具志堅委員長：2020年までもそうだけど、それ以降も含めての総合的な考え方で作っていくと。

桐谷教育長：はい。

具志堅委員長：そうでないとおかしくなってしまうからね。

黒岩知事：今お話が出て付け加えた方がいいと気付いたのですが、「かながわパラスポーツ推進宣言」をしたのですが、パラスポーツとは何かというと、パラリンピックの競技です。パラリンピックとオリンピックは要するに何なのですかと。オリンピックは健康者のスポーツ大会、パラリンピックは障害者のスポーツ大会という言い方をしますが、ちょっと待ってください、我々は未病という話をしている中で、健康か病気ではなく、健康と病気の間はグラデーション、これは未病だといったときに、健康者と障害者がはっきり分かれているというのは、未病的な考え方からいったら、高齢だといったらみんないろいろな障害が出てくる。足が不自由になってきたり、目が近眼になるだけでも一つの障害ですよ。そうすると健康者と障害者がいるのではなくて、みんながやはりどこか障害とつながっている、そういう発想に立つべきでないのかなということで、パラスポーツという言い方を。パラリンピックというのはオリンピックの後に開かれて、なかなか競技場がいっぱいにならないですよ。我々は神奈川からパラリンピックの競技場もお客さんでいっぱいになりたいという思いの中で、パラリンピックでやっている競技をみんなでやっとう。実際「かながわパラスポーツ推進宣言」、この間第1回目のキックオフのイベントをやったのですが、私自身も挑戦しましたが、車椅子バスケット

ットボール、あれは別に誰でも乗れるわけですよ。あれに乗ってやるとみんなでできる。それとかブラインドサッカーをやりました。目隠しして、目隠しすればみんな同じですから、鈴の鳴るサッカーボールを蹴りながら、といったことによって一緒になって楽しめる。こういったものは、学校の教育現場でもやっていたいいのではないかなと、パラスポーツというものをね。そんな事を感じております。親しみがあって自分達もやっているという思いがあったときパラリンピックを2020年にはみんなで見に行こうじゃないかという形になっていくと思っています。

高橋委員：とても心強く思ったのですが、メディア出身の知事の前でまことに恐縮ですけど、メディアの風潮としてAかBかみたいな白黒付けるみたいなのが強くて忌々しく思ってきましたが、間が実は重要なんですね。病気を持っているが、十分休息を、睡眠をとっているからそれが出ないというだけのことで。そういう意味で私はやはり健康と病気もそうだし、特に文化の面でも、私は先日県立博物館で鎌倉時代の茶道を見に行ったのですが、いろいろな文化の栄養分をきちんと保存する。その中で心が豊かになる、そういうものを計算するとこれはいくらになるのかという時代ですけど、それを少し抑えて、今おっしゃったようなボーダーなものが病気にならなくてすむのだという事はとても大事なことなのですが。文化的にもね。私は知事健康と文化政策は、同意できると考えています。

河野委員：考え方は私たちが企業や社会の中で高齢65、70歳まで働くようになると、障害者ではなく高齢者が障害者の一部を持つので、障害者の周辺をぼかしてダイバシティーを説明する形になっているので、まさに今のところは考え方で、これは本当にいろいろなところで、ボーダーというかグレーゾーンというものを大切にする時代になってきたのだなと思いました。

黒岩知事：本日皆様から頂きました貴重なご意見については、再度検討させていただきます。そして今後の総合教育会議で再度皆様にご提示し決定したいと思います。

議題3 その他

黒岩知事：議題3ですけれど、その他大綱(案)以外にも何かご意見がありましたら、よろしいですか。

具志堅委員長：はい。

黒岩知事：それでは本日はこの程度とさせていただきます。事務局から何かありますか。

平井政策部長：それでは次回以降の日程・会場につきましては、あらためて調整させていただきますので、よろしく申し上げます。以上をもちまして第1回神奈川県総合教育会議を閉会いたします。長時間に渡りありがとうございました。

会議資料

資料 1 神奈川県総合教育会議運営要綱（案）について

資料 2 かながわ教育大綱（仮称）について

資料 3 かながわ教育大綱（仮称）

参考資料 地方教育行政の組織及び運営に関する法律（抜粋）